

小学校生活科教育の研究

仲間とのかかわりのなかで、自己を見つめ、自ら動き出す子どもを求めて

愛知教育大学附属岡崎小学校 藤谷公寿

1 はじめに

今研究のテーマは、自己を見つめる姿を引き出す教師支援のあり方を探ることである。これは、生活科の新しい学習指導要領で強く打ち出されたものとして、自己の成長を自覚させるための自分自身への気づきの質を高めていくという方向性に対する先行提案となり、少しでも価値を見出せるものになればという願いのもとに、テーマを設定した。以下、実践を振り返り、支援の有効性を明らかにしていきたい。

2 生活科で求める子どもの姿

求める子どもの姿を、仲間とのかかわりのなかで、自己を見つめ、自ら動き出す子どもとする。「自己を見つめる」については、以下のように定義しておく。

<「自己を見つめる」の定義>

「仲間と自分」、あるいは「学級集団のなかにおける自分」のあり方（自分自身のよさ・立ち位置・立場など）を振り返ること。

自分は、一般的な「僕・私」。自分の存在。自己は、他者との関係性から見た自分、または他者から見た自分。

求める子どもの姿に「自己を見つめる」を掲げることには、非常に重要な意味がある。自己を見つめ、「できるようになった自分」や「目標を達成しようと頑張っている自分」に気づくことは、自分自身の変容を肯定的に受け止めるということにつながると考えるからである。こうした「頑張ればきっとできるだろう」という自分に対する肯定感こそ、自ら動き出そうとする姿のエネルギーであり、自立していくための基礎にあたる。

自己を見つめるには、仲間の存在なくしてあり得ないことは、上記の定義がなくても明白なことである。自分の目には映らない「自分自身」と向き合うことが難しい低学年の子どもたちにとって、目に映るものは仲間の活動であり、心に感じられるのは仲間の思いである。低学年では、いっしょに活動する仲間が、目に見えない自分を見るためのものさしとすれば、自己を見つめていく姿を引き出していけると考える。

3 仮説と教師支援

<仮説>

立場や役割の異なる人々と自分とのかかわりを強める活動・体験において、自分の活動や体験による気づきに対して、「他者と自分」や「自分と自分」を比較させるための支援を行えば、自己を見つめ、自分自身への気づきを拡げることができるだろう。

※「自分自身への気づき」は、単元目標を具現した姿に迫っていく気づきとする。本単元でいえば、「店の人 から見た自分がどうであるかという自分自身に対する気づき」。

【仮説に関する教師支援】

本研究では、以下の2つの教師支援について、その有効性と子どもの意識のありようを明らかにしていく。

【教師支援①】

「前の自分」と「後の自分」を比較する

「自分と自分」を比較したことによる気づきを学習記録として、文章化させることによって、自分自身の変容（成長）に関する気づきの自覚を促す。

<支援の具体>

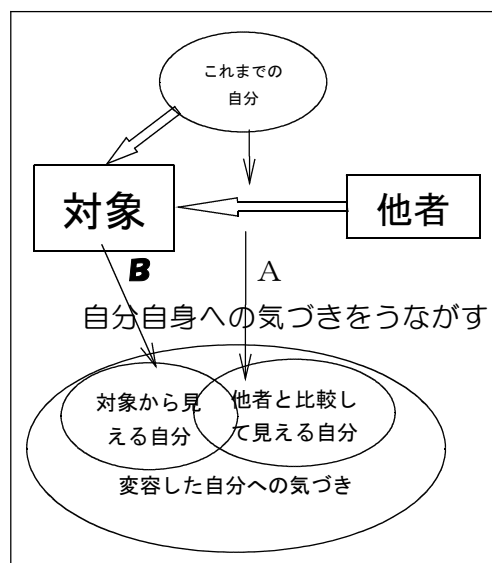
○二七市体験の前

これからやる活動に向けて「自分はこうしたい」という願いを書かせる（＝活動目標を自分で設定させる）。

○二七市体験の後

活動して獲得した気づきを自由に書く欄に加え、「二七市に行く前の自分と比べて」という欄を設け、「体験前」の記録を読んで気づいたことを書く。これは、自分が立てた目標に自分がどこまで近づいたかを考えることで、自分自身に向き合わせることをねらいとする（右図中のBの矢印）。大切なのは、二七市後の自分が、二七市体験前と何が違うのかを自分自身で気づいていくことである。また、自分と同じ店や、他店での仲間の活動の様子から見つけたよさを取り入れたいと考え、そのよさから体験前の自分との違いを自覚していく姿も期待したい。ただ、低学年の子どもたちに、体験前と後を比べる場を与えたからといって、その違いがたやすく見えてくるものではないだろう。ここで、学級の子どもたちに芽生えつつある、自分を客観的に見る目がはたらくのだろうが、問題は、体験前と後の違いを本人がどう受け止めたかである。目標の達成具合をどう受け止めたか（どう自己評価したか）は、教師の目と子ども自身の主観的な目では違うであろう。しかし、たとえ食い違っても、子ども自身が考えた振り返り方に教師は目を向け、認め励ましていくことに価値がある。こうして自分が設定した活動目標に向き合わせることは、自分自身の成長を自分で見つけ出す作業であると考ええる。

累積した「体験する前の自分と比べて」欄に目を通すことは、子どもたちは、自分の活動事実を振り返るだけでなく、その時その時の自分の気持ちにふれる場となり、「単元全体をくぐった自分」を振り返ることにもつながる。



【教師支援②】

他者同士の比較によって見えたずれ・違いをもとに自己を見つめさせるためのはたらきかけ ～かかわり合いでの支援～

教師支援②では、全体に取り上げる子（二者）の活動に込めたそれぞれの思いを比較させることで、互いのずれや違いを明確にさせる。ずれや違いをもとに、「他者と比較して見える自分」といった視点から自己を見つめる姿を引き出すことをねらいとする（上図中のAの矢印）。この支援が有効にはたらくために必要な条件を以下に示す。

<支援の具体>

①かかわり合いで比較させる「思い」の吟味

取り上げる他者の活動やその活動に込めた思い（自己評価）が、単元目標に迫っていくものであり、その二者の思いを比較させることによって、両者のそれぞれの思いが浮き彫りにできるものであることが大切である。

本単元における子どもたちの活動を大別すれば、お店の人を直接的に喜ばせるためのお店の人と自分との1対1のやりとりを考えているケースと、もっとたくさんお客さんが来てくれるように店のお手伝いを

考えるケースとあるだろう。そのなかでも、どちらも活動の根幹にある思いはお店の人に向けられているが、その思いの程度の違いが活動の方向性の違いになっている場合を取り上げ、それぞれの子の思いや考え方のはっきりおさえる。おそらく、多くの子どもたちの意識は、自分がよかれと思って考えた活動を行えば、優しいお店の人は褒めてくれるだろうと考えており、自分の活動がお店の人を困らせてしまうことはないかという感覚は少ないだろう。また、子どもによっては、お店の人の働きぶりに強い興味・関心を抱き、自分自身がやってみたいという思いに心を奪われることが考えられるだろう。

この支援における自己を見つめる視点は、「自分の活動は、お店の人にどう映るか（役に立っているのか）」ということであり、他者と自分の活動に込めた思いの度合いの比較を突きつけることにある。

②他者の活動や思いに対する共感的理解

学級の子どもたちの思いに対して感じたことを伝えるだけでなく、もっと相手の気持ちを詳しく知ろうと質問したり、相手の立場に自分を置いて想像したことを伝えたりする。こうした共感能力を発揮することで、より「他者と自分」との比較を、より自分事にとらえることができるだろう。

4 教師支援についての検証

(1) 【教師支援①】 「前の自分」と「後の自分」を比較する

「自分と自分」を比較したことによる気づきを学習記録として、文章化させることによって、自分自身の変容（成長）に関する気づきの自覚を促す。

ここでは、計4回の活動の前後において、瑛心の自分自身への変容（成長）に関する気づきがどうであったかを考察する。

瑛心は、二七市でのお手伝い活動においては、果物屋(店主：堀さん)を自分で選んでいる。以下は、その果物屋での活動の前と後の瑛心の自己評価である。

<自己評価場面①>

《二七市体験前》 「いらっしゃいませ」とか大きな声で言ったり、落とさないように袋に入れたりするのをがんばりたいです。ぼくは <u>すごきんちょう</u> します。作った看板を渡したりできるか <u>とてもしんばい</u> です。おつりをちゃんと出せるか <u>もきんちょう</u> します。 (11月1日 学習記録)
《二七市体験後》 行く前は、大きな声でいらっしゃいませと言うつもりでした。少しきんちょうしたけど、だんだん楽しくなってきた。大きな声でできるようになった。ミカンをふくろにいれるもくひょうはたっせいできたけど、 <u>そっと</u> ふくろに入れるのはむずかしかったです。ゆきみちゃんはぼくよりうまくてほりさんからほめられていた。少しくやしかったけれど、ゆきみちゃんのを見てだいたいわかったので、今度はほめられるといいです。たまに、買ってくれたお客にありがとうございましたと言うのをわすれてしまうので、次はわすれずにがんばりたいです。 (11月2日 学習記録)

活動前の瑛心は、自分がやれるのかという心配の方が強く出ており、不安な自分を強く自覚している状態と言える。袋詰めやお釣りを渡すということには「きんちょう」と表し、作った看板を渡せるかどうかは「心配」と表している。これに対し、活動後の瑛心は、「しっかりと言う」「ミカンを袋に入れる」という目標を意識しており、「だんだん……できるようになった」ことをはっきりと自覚している。隣で活動している幸美だけが褒められたことは、自分も堀さんに認められたいという意識をかきたてたようである。「そっと」入れることの難しさ、その難しさを目の前で上手にやってしまう幸美が堀さんに褒められたことは、活動を振り返った記録にも登場してくる。

瑛心は、買ってくれた客に「ありがとうございました」を言い忘れてしまったことに対し、堀さんから「ちゃんとありがとうございましたを言わなきゃダメだよ」と言われたことを、少し気にしていたことが対話からわかった。その時、瑛心は「注意された」という言い方をし、気にしているようだった。次こ

そ堀さんにほめられるようにと強く意識しただろう。

<自己評価場面②>

《二七市体験の前》

さっき(自分は)まん中の方と言っていたけれど、そうたくんのを聞いて、プレゼントもあるなと思い出して、店の人のためにだと思った。でも、そうたくんと同じ場所じゃなくて、そうたくんより少し真ん中の方によっていると思う。大きい声の方もいるけど、かんばんも前はおすすめの品ばかりで、あまり売れてない品物もわかったので、それをかんばんに書いて前よりも客を呼んでみたい。 (11月16日 活動を見直すかかわり合い後の学習記録)

《二七市体験の後》

行く前は、チラシをくばることが目ひょうでした。80%ぐらいたっせいできました。100%じゃないわけは、さいしょ、少しきんちょうしたからです。はじめてだからしょうがないかもしれないけど、もう少しがんばれたと思いました。けれどチラシは全部くばることができたことはよかったです。 (11月17日 学習記録)

この2回目のお手伝い活動の前の記録は、活動を見直すかかわり合い後に書かれたものである。自分を「まん中」と判断しているのは、かかわり合いでの壮汰の意見をもとに、壮汰を基準に自分の立ち位置を意識した状態である。「前は……わかったので」の記述からは、ただチラシを作って配ることだけではなく、よりねらいを具体化した看板作りへと意識を高めている。

「はじめてだから……がんばれたと思う」からは、目標を達成したい自分と、緊張して100%の力を出せなかった自分に向き合っていることがわかる。特に、「もう少しがんばれた」は、後悔というよりも次の活動への自信が芽生えたと解釈した方が妥当であると感じる。瑛心を突き動かしているのは、堀さんに褒められたいという外発的動機ではなく、結果として堀さんに認めてもらえる自分自身への挑戦であり、瑛心は、自分の手伝いに対する評価基準を自分で持ち始めていることがうかがえる。

<自己評価場面③>

チラシをたくさんくばれるようにしたい。前よりチラシが多いので、たくさん人をよんで、チラシを全部なくすぐらいががんばりたい。ほりさんから、くだものを入れるのが速いと思ってもらいたい。くだもの入れ方が前わからなくてできなかったけど、もうおぼえてるし、一人でするのでそう思っています。 (11月21日 学習記録)

チラシをすべて配ることだったけど、2枚ぐらいいしもらってくれなくてたくさん残ってしまったから目ひょうたっせいできなくてざんねんでした。でも、ほりさんからみた自分は、思ったようになったかなとおもいました。ぼくが考えた、店の人から見た自分は、くだものを入れるのが早くて役に立つなと思われたかったです。そう思ったわけは、らっかせいもちゃんと入れたし、ミカンもちゃんと入れたから。それにほりさんに入れるのが早いと言われたからです。 (11月22日 学習記録)

ここでは、「堀さんから見た自分」が「果物を速く袋に入れている自分」であることが目標となっている。「もうおぼえてるし、一人でする」からは、これまで経験を積んできた自分に自信をもっていることが伝わってくる。

この学習記録は、2つの視点から活動を振り返っていることがわかる。1つは「目ひょうたっせいできなくてざんねん(活動内容に対する目標)」と書く一方で、「でも……思ったようになったかな」と、自分の取り組みを肯定的に記している。そして、堀さんの目には、きっと役に立った自分が写ったのだらうと感じている。自分の考えの根拠を必ず書いてくる瑛心であるが、今回で言えば、前回のお手伝いでやれなかった落花生の袋詰めを、瑛心一人でやり切ったことをあげている。瑛心にとっては、堀さん本人から褒められたことは、「それに」と記したような付け足し程度の位置づけであったと考える。

振り返って感じたことは、どんどんほりさんのためにがんばっているんだなと感じました。最初、ミカンと入れるのが大変そうで、手伝ったけどむずかしくて役に立てなかったです。幸美ちゃんはなれているのかうまくやっていて、すごいなと思いました。そこで、幸美ちゃんを見て役に立てるかも知れないと思いました。でも、次もミカン入れができなかった。でも、らっかせいを入れる仕事ことができました。入れ方がよくわからなくて、堀さんが手伝ってくれておぼえました。最後の手伝いでは、前とちがってはじめて一人でやって、ほりさんから「がんばっているね」とほめられました。どんどんほりさんのためになっていると思いました。 (11月24日 学習記録)

堀さんのために頑張ることは、このお手伝い活動においては当然のことであるにもかかわらず、「どんな……と感じました」と書いている。最後の一文にも表現を繰り返している。つまり、自分自身の頑張りが一貫して堀さんのためであったことを再認識したと読み取れる。これは、これまで1回1回の活動を夢中になってやってきたが、活動を終える度に書いた記録(自己評価)を読んだことによって、瑛心は初めて包括的に活動を振り返ることができたと言える。

<教師支援①の有効性の結論>

教師支援①は、瑛心の記録からは、広い意味において「自分自身の変容(成長)」を引き出したという点で有効であった。ただ肝心なことは、自分の成長を見つけることができる成功体験が前提にあることである。さらに、「人とかかわり」を対象とした実践には有効だと考える。

活動前と後の自分を比較して文章化するという行為自体は、直接的に自分を振り返るのだから、自分自身への変容(成長)が書かれて当然である。教師支援①の検証としては、自分をどんな視点から振り返ったのかが問題である。子どもたちの記録によると、その視点は大きく2つ分かれた。1つは、具体的な成果(おつりの計算が速くなった、大きな声で呼び込みができた、など)から、どんな技能・知識が身についたかという視点で成長を記す場合。もう一つは、瑛心のように、自分のお手伝い活動への向き合い方がどうであったのかという視点である。本単元でめざす姿である「店の人から見た自分がどうであるか」という視点に近いのは後者である。

今振り返ると、これまでの私は、くすのき学習において子どもたちに活動を振り返る際には、たくさんさんの活動映像や写真、かかわり合いの板書B紙を子どもたち全員に見せながら、これまでの活動や思いを思い出させようとしてきた。そして、学習記録を読ませて…と、一方的に与えまくっていた。そして、どの活動場面に子どもたちが引っかかってくるのかは、出たとこ勝負という感じだった。しかし、自分自身への気づきに特化して書かれた記録(自己評価)を累積し、その成長の足跡を読むことは、長いスパンでの自分の成長に気づかせることになると感じた。

他者同士の比較によって見えたずれ・違いをもとに自己を見つめさせるためのはたらきかけ ～かかわり合いでの支援～

「11月16日の活動を見直すかかわり合い」における教師支援②の検証

11月16日に行ったかかわり合いの本時目標は、以下のように設定した。

本時の目標

- ・ 二七市体験活動に込めた思いや考えを聴き合うなかで、自分と仲間との思いの共通点や違いに気づいたりしながら、店の人役に立つための活動にはいろいろな考え方があることに気づかせたい。
- ・ お店の人の役に立ちたいと考えた活動に込めた仲間の2つの思い・考え方を比べることで、自己を見つめ、次の二七市体験活動で何をすればよいかを自分で考える姿を引き出したい。

かかわり合いを構想するために、次の二七市お手伝い活動に向けた目標を書いた学習記録から、二七市の人役に立ちたいという思いや願いの背景にある意識を読み取り、分布図に落としたうえで、授業構想をした。以下は、かかわり合い前の瑛心の学習記録である。

おきやくさんにちらしをわたしてまたきてもらって、オススメの品とかを買ってもらいたいです。ぼくがちらしをくばっておきやくさんをよんでいつもよりおきやくがたくさん来て、ほりさんにおきやくをよぶのがとくいだなとみとめてもらって、ほりさんのや
くにたちたいです。(11月13日 学習記録)

授業構想図で子どもの意識を分布図に落として感じたことは、瑛心のお手伝い活動への意識の方向性をはっきりもっているということである。二七市の店の人に褒めてほしいと考えたり、喜んでほしいと考える子のなかにあって、瑛心は、堀さんに「とくいだな」と認めてもらいたいと考えている。この「とくいだな」は、「上手にお手伝いできる自分」を想定し、自分に向けた褒め言葉である。つまり瑛心は「ほりさんの役に立ちたい」と記述しているものの、「一生懸命に頑張ったり工夫したりできる自分でありたい

い。そして、そうしたところを認めてもらいたい」という意識が強いと考える。

続いて、かかわり合い後の瑛心の学習記録を見てみる。

さっき(自分は)まん中の方と言っていたけれど、そうたくんを聞いて、プレゼントもあるなと思い出して、店の人のためにだと思った。でも、そうたくんと同じ場所じゃなくて、そうたくんより少し真ん中の方によっていると思う。大きい声の方もあるけど、かんばんも前はおすすめの品ばかりで、あまり売れてない品物もわかったので、それをかんばんに書いて前よりも客を呼んでみたい。
(11月16日 学習記録)

かかわり合い前と後の学習記録を比べることで変容が読み取れるところは、最初から2行目までの記述である。瑛心は、次のお手伝い活動に対する自分の意識を「そうたくんより少し真ん中」と、お手伝い活動に対する壮汰の意見を基準にすることによって自分の立ち位置を見出している。これを瑛心の自己を見つめた姿としたとき、かかわり合いの最中にどんな意識をもち、なぜこうした姿になったのか、教師支援②との関係を考察してみたい。

では、かかわり合いの授業に構想した支援について、「支援の具体①(◆1)」と「支援の具体②(共感的理解, ◆3)」が実際の授業場面でどうであったかを見ていく。

◆1にかかわる授業場面

○「支援の具体①」

◆1 第1指名を伶音とし、二七市で緊張してうまく声が出せなかった前回をもとに、次の二七市では大きな声で呼び込みをしたいという思いを語らせる。そして、前回の活動と比較した伶音の発言に対して、同じ視点から次の二七市活動を考えている子(あかねや陽紀ら)へ発言をつなげていく。ここで、「前回の二七市よりも、うまくできるようになった自分」が、店の人の役に立てることだということをおさえ、他者同士を比較するための比較対象の1つとする。

◆1は、他者同士の思いを比較させたい思いの1つ「前の活動した時の自分よりも、もっとできるようになりたい」を引き出すことがねらいであった。授業の実際では、◆1が大きくふくらんだ。

氏名No.	教師の発問及び子どもの発言・反応
T 8	みんな前と比べて今度はこんなことがんばるよって今、いつてくれたよね、同じ思いの子、いる？
結 9	私は、前の時はあんまりお店の人に喜んでもらえなかったから、今度はお店の人がたいへんそうなのをやりたいです。わけは、お店の人はいつも、あのお店、買ってくれる人はあんまりいないけど、でも、品物をおいたりとか、それがすごい大変そうだったからです。
T 10	はい、彩良ちゃん。
彩良 11	私はちょっと、結ちゃんと似てて、前、お手伝いする前に、お買い物したときに、ミカン入れを、大変そう、大変そうだったし、あのちょうど今、ミカン入れをやっているから、そんな時に、自分がちょっと、ミカン、ミカンを入れるのに、ちょっと、こぼしちゃったから、だから、ミカン入れとかを、やってあげた、たりしたい。 (11月16日 活動を見直すかかわり合い① 授業記録)

T 8「みんな……くれたよね。」では、それまでに至るまでの発言が「前のお手伝い活動と比べて次に頑張りたいと思っていること」だと確かめた(と、教師は思っていた)後に、「同じ思いの子、いる？」と投げかけた。ここで、中心支援となる◆3にじっくり考えさせたいと考えて、挙手した結9を指名し、比較させたいもう一つの思い「お店の人のために」という考えを出した。

しかし、「同じ思いの子、いる？」という投げかけをしたのに、なぜ結が挙手したか。それは、T 8において、自分ができるようになりたいということがきちんと言えてなかったために、結9「前の……喜んでもらえなかったから」という発言を引き出してしまったという問題だけではない。そもそも比較対象にあげようと構想した2つの思いが、「店の人の役に立ちたい」ことに相通ずることで、この2つの違いをこの時点で理解すること自体が難しいことが要因だと考える。

○「支援の具体②」

他者の活動や思いに対する共感的理解

授業序盤で、杏奈が教師の聞き返しに答えられずにじっと立ちすくんだ場面を取り上げる。T 1 4は

「来てもらえるようにするためには、例えば、どんなことをしたいの?」という意味を杏奈に尋ねたつもりであったが、あまりに言葉足らずであるために、杏奈を困惑させてしまった。もし、聞き返しの真意が伝わったとしたら、杏奈はおそらく『よく切れるハサミだよ』と言ってから、『いらっしゃいませ』と言った方がいい」と答えたであろうと振り返る。さて、ここでは、杏奈19に対する子どもたちの共感的理解の示し方と、教師の出との関係性について述べたい。

杏奈	13	えっと、私は、怜音くんとちょっと違って、お客さんがあんまり来ないから、んと、のんびしてても大丈夫だから、んと、できるだけお客さんをたくさん、んと、来て、来てもらえるようにしたい。
T	14	例えば?
杏奈	15	…。
T	16	杏奈ちゃん何屋さんだっけ?
杏奈	17	金物屋さん。
T	18	金物屋さん。杏奈ちゃん、どんな風にした?
杏奈	19	…。
T	20	誰か、杏奈ちゃんに代わって言える子いる?お、いる。お、莉々子ちゃん。いいよ、杏奈ちゃん、座って。
莉々子	21	えっと、杏奈ちゃんの言いたいことは、多分、杏奈ちゃんは、よく、裕之介くんといっしょに何か、手紙とか作ってて、裕之介くんと杏奈ちゃんが言ってたけど、はさみが切りやすいって言ってて、それを、何か、宣伝、何かすれば、お客さんもいっしょに来るんだと思います。
T	22	今の聞いてどうだった、杏奈ちゃん。それで良かった?
T	23	そっか。裕之介くん、どうだった?
裕之介	24	いい。
T	25	いい。言ってよ。
怜音	26	(つぶやき)僕だったらいいと思う。
T	27	え、どういう意味?僕だったらって。どうぞ。
怜音	28	えー、僕がもし、 <u>裕之介くんや杏奈ちゃんの立場だったら</u> 、他の人にいろいろなことを作っているっていうことが、僕もいいと思う。
		ー〈略〉ー
瑛	31	<u>裕之介くんや杏奈ちゃんの立場だったら</u> 、この前はさみが切れやすいって言ってたのが聞こえたんだけど、だから、はさみがすごく切れやすいって言って宣伝してるのは、結構いいことだと思う。
T	32	結構いいこと。
T	33	柊生くん。
柊生	34	僕は、宣伝するよりも、 <u>お客さんの方へ行って、宣伝した方がいい</u> と思います。
T	35	訳は?
柊生	36	訳は、お店の所だったら、遠い所、遠い、遠い所にいるお客さんだったら、あんまり聞こえないと思うから、だから。ー〈略〉ー
真千	39	えっと、私は、柊生くんのことを聞いて、思ったことがあって、あんまり近くに行くと、何か、おかしいと思われるから、おかしいと思われるといけなから、だからやっぱり、あの、近くで宣伝、あの、まず、あの、杏奈ちゃんとか、裕之介くんとか、はさみは切りやすいよ、とか、そういう聞いてもらったことを紙に書いて、それを、あの、その、はさみの位置の所に置いて、それから、それでも、置いて、その、あの、やっぱり宣伝をしないと、そんな、わざわざ、あの、みる訳じゃないから、だから、宣伝もしながら、紙にも書いたらいいと思います。
T	40	瑞巴ちゃんは今のところに関係すること
瑞巴	41	えーと、柊生君の意見なんだけど、あんまり近いと、あの、ことばで言うと、ことばで忘れてっちゃうから、チラシとかに書いた方がとてもいい。 (11月16日 活動を見直すかわり合い① 授業記録)

T20は、何も言えなかった杏奈は何を言おうとしていたのかを学級の子どもたちに考えさせて、杏奈の思いに歩み寄ろうとする姿を引き出そうとした出であった。無言の杏奈に対し、「聴いて応える」姿とは言えないかもしれないが、杏奈の活動を直接見た莉々子21は「裕之介君と……作って」と語り、瑛31は「言ってたのが聞こえたんだけど」と語っている。また、杏奈の立場に自分の身を置き、怜音28は「裕之介君や杏奈ちゃんの立場だったら…」と語っている。ここで、「～した方がいい」と発言した柊生34によって、杏奈の思いからチラシの配り方へと話題がすり替わってしまうと察したが、真千39では、柊生39を受けたうえで杏奈の立場に寄り添った意見を語ることができた。この一連のやり取りは、朝のスピーチで見られる光景であったため、杏奈に対してどうかかわろうとするかはすぐ想定できたことであった。このように杏奈に意識が向いた発言であるが、個の二七市のお手伝い活動がベースになっていることが発言からにおってくる。ただ、かわり方が弱いのは、T20自体が難しすぎることで、杏奈の活動の具体を見た子の発言が少ないこと、何よりも、杏奈自身が発言できなかったことが要因と考える。

◆3にかかわる授業場面

○「支援の具体②」

◆3 取り上げた瑞巴と怜音の二者の思いについて、「この瑞巴たちと怜音たちの思いは、何が違うのかな」と問いかける。ここで、同じではないと考えた子(瑞巴たちに近い考え方をしている真千、幸美、亜里沙)

を指名し、2つの違いを語らせることでずれや違いをはっきりさせたあとに、「自分はどっちなのかな」と問いかける。ここで、自分のやりたいことがはっきり見つけないでいる柊生に自分の考えを尋ね、その柊生の答えをどう感じたかを全体で取り上げる。柊生の思いはどちら（瑞巴側、伶音側）に近いかを学級全体で考えることを通して、個々が自己を見つめるための素地を作る。

◆ 3 は、他者同士の思いの比較によって違いを明確にさせたあと、その2つの思いと自分を比べ、自己を見つめさせることをねらいとした。

T	57	ー〈略〉ー今度二七市に行ったら、『前できなかったことがもっとできるようになるぞお』っていう思いをもっていう子と『お店のためにこんなことをしてがんばるよ』っていう思いの子と今出してくれましたね。で、 <u>こっちのがんばる思いとこっちのがんばる思いは、何がちがうかな。</u>
莉々子	60	ー〈略〉ー えっと、「前よりもできるようになる」っていうところは、あの、自分、自分に対して、なんか、これがんばりたいっていうので、で、店の人のためにやるっていうことは、あの一、お店の人に、あの、役立ちたいことを あん…。
伶音	66	ー〈略〉ー 「前よりもできるようにがんばりたい」ということは、前の自分と今の自分を比べてそれで、前よりも自分が上達することを、前よりもできるようにで、「店の人のために」は、お店の人に対してこういうことはどうかなということを店の人のためにがんばる。
柊生	70	ー〈略〉ー ぼくは、莉々子ちゃんといっしょで、「前よりもできるように」が自分の目標、自分の目標で、で、「店の人のために」は、店の人のために、役立つ、ということをやりたい。
仁貴	78	ー〈略〉ー えっと、「前よりは、も、できるように」は、 <u>前の自分に負けないようにがんばる</u> ってことで、「お店の人に」っていうところは、お店の、 <u>お店の人、の大変なことを、がんばる。</u>
T	79	うん、なるほど。自分に負けない。ちょっと教えて。 <u>垂里砂ちゃん、どう思う？このちがいがいい。</u> 今、友だちの聞いて思ったことでもいいよ。ちょっとみんなに伝えて。
垂里沙	80	やっぱり莉々子ちゃんといっしょで、えっと、前、前よりも、できるようになっていうほうは、自分のことで、思っていることだから、莉々子ちゃんといっしょで、店の人のためには、うーん、えっと、自分のことじゃないから、お店の人のために、お店の人のことを対して、考えて、考えているから、うーん、まあ、莉々子ちゃんと同じだと思う。
T	81	こっちに近いか？なるほど、はい。
真千	82	うんと、まさき君にちょっと似てるんだけど、前よりもできるようには、やっぱり自分は前にこうしたけど、だけど、次に行くときには、前は、これでちょっと失敗しちゃったけど、次のあの次に行くときにはどうしようとか、作戦みたいなので、店の人のためには、うんと、店の人はやっぱり、あの、前みたいに土曜日行けなかったから、土曜日とかそういう日のとき一人だから、あの、3人のところは3人だけど、だけど、一人のところが多いいから、一人のところが、やっぱり大変で、だから、あの～だけだとまに、たまに行くときは、やっぱり、役に立ちたいから、それだから、あの、行くときと行かないときと、あるから店の人は、あの～こう思っほしい、お店の人は、やっぱりうれしいと思っほしいねって思っ、お店の人を……。 (11月16日 活動を見直すかかわり合い① 授業記録)

構想通りのT 5 7 の出を受けた発言を見てみると、莉々子6 0 から真千8 2 までの発言は、2つの思いの違いをはっきり答えているが、仁貴7 8 の発言内容が、教師の意図に最も近い。1つ目の思いを「負けないように」と言い、2つ目の思いを「お店の人の大変なことを」と言った仁貴は、他の子たちの、言葉の読み取り的な内容の発言とは質が違うことに気づいた。以下は、かかわり合い前の仁貴の学習記録である。

お客に試食を食べて「おいしい」と言ってくれるように頑張って、20人ぐらいの人を呼びたい。新實さんのすごさに追いついて、役に立ちたい。でも追いつく前に、新實さんのミカンを一杯入れてほめてもらいたい。 (11月13日 学習記録)

かかわり合い前の仁貴の意識を本時の2つの思いのどちらかに分けた場合、前の自分よりもできるようになりたいという意識に入ると判断する。ただ、「新實さんのすごさに追いついて」という記述からは、仁貴にとっての目標とは、自分ができるようになりたいというより、「新實さん自身になる」ことだと言える。記録に書かれた「ミカンを一杯入れて」とは、まず、中型トラックの荷台に積まれた段ボールのミカン箱からミカンをつづつ取り出し、それを3つのサイズ（S、M、L）に分別する。そして、S、Mサイズのミカンは10個ずつ、Lサイズのミカンは11個ずつをカゴに入れて店頭並べ、カゴ売りできるようにするまでの作業をさす。腰を曲げっぱなしのこの作業はすごく疲れるし、時間もかかって大変である。仁貴が新實さんの大変さを実感したことが、「新實さんのすごさに追いついて」にあたる。「でも、追いつく前に」と書いた仁貴の目標は、まずはミカン（かごに）いっぱい入れることである。これは、仁貴にとって、お手伝いの時間内に終わることがかなり厳しい目標と言える。

ここから言えることは、T 5 7の問いかけの後には、仁貴 7 8のように活動から得た実感を伴った気づきが込められた発言を引き出すことで、もっとそれぞれの活動から得た気づきが、実感を込めて出てくるであろうし、友だちの気づきに対し、実感をもって共感したり、驚いたりできるのだろう。ただ、こうした発言に限って、子どもは思いをうまく言葉に表す方法に困り、独特なたとえ方をしたり、本人にしかわからない感覚的な表現方法をする場合が多いため、聴いている子どもたちがピンとこない。ここを、教師がわかりやすい言葉に言い換えたり、仁貴の活動の具体を全体に取り上げたりして、発言を子どもたちの理解できるレベルまで下してあげる必要がある。そうして初めて子どもたちはかかわれるのだと感じる。このかかわり合いでは、仁貴の発言に対し、教師は仁貴の発言の根拠となった動を頭に描いて聴くことはできておらず、次に構想した挙手していなかった亜里沙を指名した。「自分は頑張っているけど、お店の人は頑張ったと思っているかどうか分からないから、ほめられるまで頑張る」というありさは、お店の人から見た自分はどうかであるかをいう意識をもっているため、その思いを踏まえて「お店の人のために」を語ることで、より2つの思いの違いがはっきりさせられると考えたが、そうならなかった。これは、構想段階での教師が、期待も込めながら、子どもの意識を都合よく解釈していたからである。ただひとえにとらえが甘いという反省もできるが、授業も終盤にさしかかったところでの亜里沙の意図的指名は、とらえていた前時の意識はもはや過去の意識であるにもかかわらず、「とらえと違った発言したことで構想が崩れた」と反省すること自体がおかしいことである。こうしたピンポイント指名（特に授業終盤）に頼る授業構想そのものも見直したいという課題も残った。

◆3の考察に戻る。本時の中心的な問いかけとなるT 8 3「みんなはどっち？自分は？」と出たあとには、終生の意見を取り上げ、全体で考えることで、自己を見つめるための素地を作る構想であった。しかし、残り時間がなくなったために終生の考えを取り上げる部分がそっくりなくなった形となった。授業をしながら、教師自身が授業構想のまどろっこしさを感じていたのもあった。

T	83	みんなは、どっち？自分は？
Cn	84	どっちでもないような感じ、真ん中、わかんない。
T	85	ちょっとみんなに伝えてください。難しい？難しいかな？（間があつて）瑛心君は？
瑛心	86	えっと、ぼくは、あの真ん中のような感じもするんだけど、でも、真ん中より、なんかもう少し、店の人のためにってところで、えっと、真ん中、真ん中の近くなったわけは、えっと、あの店の人のためには、あの、チラシとか配って、それであのチラシとかを配って、お客さんと呼んで、あの、チラシを全部配り終えたら、えっと、で、あの、一店に戻って、あの、うんと、看板とかを持って、「いらっしやいませ」とか言うやつで、前よりもできるように、あかねちゃんとちょっと似、あかねちゃんと一緒に、で、あの、うんと、看板とかを持ってあの、なんか持ってあの、「いらっしやいませ」ばっかり言ってるんじゃないかって、「いらっしやいませ」もいいんだけど、もっと声を大きくして、で、なんか堀さんにお勧めを教えてもらったりして、で、あの、そういう、そういうのを、あの、なんか言って「これがおすすめですよ」と言うから、なんか真ん中のような気がしました。 －（略）－
陽菜子	91	私はお店の人のために。それは、なんか、看板とかで、私がお店の人も嬉しいから、だから、私は、お店の人に向けてだと思う。 －（略）－
敬子	99	微妙な感じなんだけど、お店の人のためにが強いんだけど、前よりもできるよりは前行ってないから、一応、本物の時とちょっと同じようなことで、だから、どうしても、知らない人だと、あいさつとかは、知らない人だと、どうしてもちっちゃくなっちゃうから、自分、前よりもできるように、大きい声で宣伝したり、あいさつをするっていう方で、お店の人のためにってところでは、あのいるんなどころを知ってもらいたいってところまで、どっちもあるんで、ちょっと瑛心君といっしょで、まんなかかなと思いました。 －（略）－
迅	104	ぼくは、真ん中くらいだと思います。こ、こ、こっくらい真ん中だと思います －（略）－
あかね	118	私は迅くんと一緒に、両方ともに似てるから、どっちかに体が行くとしたらさけちゃうと思います。 －（略）－
T	121	体で言えばさけちゃうくらい真ん中で、どっちでもだよということね。みんなあかねちゃんと一緒に？
莊太	122	ぼくは、どっちかというのだいたいお店の人のためにって言う方だけど、わけはぼくはプレゼントとか作っているときに、えっと、お店の人に、お店の人のために作るんだって思っているから、あのーこっちだと思います －（略）－
幸美	125	私は、あのー、前よりもできるようにって言うほうが多いと思います。それは、山盛りのみかんを入れるときに、1つはだいたいこぼしちゃうから、だからそれを1つもこぼさずにできるようにお店の人みたいにできるようにしたい。（11月16日 活動を見直すかかわり合い① 授業記録）

ここでは、T 3の出に対する瑛心 8 6を中心に、瑛心の学習記録に登場する壮汰、敬子 9 9、幸美 1 2 2、壮汰 1 2 5の発言を取り上げる。そして、かかわり合い前、かかわり合い中（終盤での各発言）、か

かわり後の三つの場面の意識の流れから、どのように自己を見つめていったのか、その意識を考察したい。

○瑛心の場合

子ども	かわり合い前 (学習記録)	かわり合い T 83後の発言	かわり合い後 (学習記録)
瑛心	果物屋の堀さん 自分が店から離れたところでチラシを配ってお客を呼んで、また来てもらって、おすすめの商品を買ってもらおう。堀さんに「お客を呼ぶのが得意だな」と認めてもらって役に立ちたい。	えっと、ぼくは、あの真ん中のような感じもするんだけど、でも、真ん中より、なんかもう少し、店の人のためについていうところで、えっと、真ん中、真ん中の近くになったわけは、えっと、あの店の人のためには、あの、チラシとか配って、それであのチラシとかを配って、お客さんと呼んで、あの、チラシを全部配り終えたら、えっと、で、あの、一店に戻って、あの、うんと、看板とかを持って、「いらっしやいませ」とか言うやつで、前よりも、前よりもできるようには、あかねちゃんとちょっと似、あかねちゃんと一緒に、で、あの、うんと、看板とかを持ってあの、なんか持っていてあの、「いらっしやいませ」ばかり言ってるんじゃないくて、「いらっしやいませ」もいんだけど、もっと声を大きくして、で、なんか堀さんにお勧めを教えてもらったりして、で、あの、そういう、そういうのを、あの、なんか言って「これがおすすめですよ」とか言うから、 <u>なんか真ん中のような気がしました。</u>	果物屋の堀さん さっき真ん中の方と言っていたけれど、壮汰君のを聞いて、 <u>プレゼントもあるな</u> と思いだして店の人のためにだと思った。でも、壮汰君と同じ場所じゃなくて、壮汰君より少し真ん中の方によっていると思う。大きい声の方もあんだけど、看板も前はおすすめの品ばかりで、あまり売れてない品物もわかったので、それを看板に書いて前よりも客を呼んでみたい。
瑛心は、堀さんに「とくいだな」と認めてもらいたいと考えている。この「とくいだな」は、「上手にお手伝いできる自分」を想定し、自分に向けた褒め言葉である。つまり瑛心は「ほりさんの役に立ちたい」と記述しているものの、「一生懸命に頑張ったり工夫したりできる自分でありたい。そして、そうしたところを認めてもらいたい」という意識が強い。かわり合いにおいて、「店の人のためには」や「前よりもできるように」と語った活動内容は、確かにそう受け取れるものである。ただ、瑛心は、そうした活動をしっかりやり遂げる自分でありたいという思いがベースにあると考える。 <u>自己を見つめる姿</u> 瑛心は、次のお手伝い活動に対する自分の意識を「そうたくんより少し真ん中」と、お手伝い活動に対する思いについて、壮汰の意見を基準にすることで自分の立ち位置を見出した。ただ、壮汰の「お店のために作っている」という発言を聴いたことで、壮汰と同じ「プレゼント」を作ったことを思いついているが、瑛心が一番たくさん時間をかけたのは、店の看板やチラシである。やはり、プレゼントは直接堀さんにあげてしまうことに対して、チラシや看板はお客に見せるものであるため、そこには堀さんの存在が重なりにくいのだろう。			

○壮汰の場合

子ども	かわり合い前 (学習記録)	かわり合い T 83後の発言	かわり合い後 (学習記録)
壮汰	ちりめん屋の山田さん ちりめんじゃこの看板を出して、じゃこをいっぱい売りたい。 <u>自分がいたから</u> いっぱい売れたと言われるぐらい、たくさん売る。	壮汰125 ぼくは、どっちかというと <u>だいたいお店の人のためについていう方</u> だけど、わけはぼくはプレゼントとか作っているときに、えっと、お店の人に、 <u>お店の人のために作るんだって思っているから</u> 、あのーこっちなだと思います。	ちりめん屋の山田さん 真ん中の瑛心君のを聞いて、僕と比べて全然違って、瑛心君はチラシとか看板とかあげたり見せたりで、僕はお店のことで瑛心君はお客のことだから <u>大きい違い</u> だと思う。僕が「 <u>前よりもできるように</u> 」だったら、前は、店の人の指示に従うだけだったので、明日は自分の手でちりめんを売ってあげたい。
「自分がいたから」は、自分の頑張りを認めてもらいたいという意識であるが、その視点は「店の人から見た自分」であり、本人はこの視点を強く意識はしていないため、自分はどんな意識で活動に取り組もうとしているかが定まっていないと考える。それが、T 83によって「だいたいお店のために」と自分自身を位置づけ、「お店の人のために作っているんだって思っているから」と理由をはっきり答えている。 <u>自己を見つめる姿</u> 壮汰が瑛心86に反応し、瑛心と自分を比べることで「大きい違い」をはっきり壮汰なりに感じ、「よりお店の人のために頑張りたいのだ」という自分に気づいている。さらに『「前よりもできるように」だったら』と、「前の自分と後の自分を比べて」という新しい視点をもって、次の目標を立てていることがわかる。			

○幸美の場合

子ども	かわり合い前 (学習記録)	かわり合い T 83後の発言	かわり合い後 (学習記録)
幸美			

も			
幸美	果物屋の堀さん 買ってくれた人に「ありがとうございます」という気持ちで品物を渡したい。それをやらせてもらえなかったら、ほかのことをきばきとやりたい。堀さんの方が、何が大変かをよく知っているから、堀さんから言われたことはしっかりやる。	幸美122 私は、あの一、前よりもできるように<u>いこう</u>と思います。それは、山盛りのみかんを入れるときに、1つはだいたいこぼしちゃうから、だからそのそれを1つもこぼさずにできるようにお店の人みたいにできるようにしたい。	果物屋の堀さん 私は「前よりもできるように」の方が合っていると思ったけど、<u>確かにそう思ったけど</u>、店のために少しありそう。それは、つまり店の人のために、例えばチラシや手紙や看板を作るのは、<u>前の自分よりできるといことは違うから</u>。 明日は、品物をこぼさないようにやること、手紙を心を込めて作ったことをわかってもらうために頑張りたい。
幸美自身は、「堀さん」の存在を強く意識しており、これがお手伝い活動に対する幸美のベースとなる考えである。ただ、T86によって、自分のお手伝いへの思いは「前よりもできるようにいこうほうが多い」と、難しかったミカン入れを理由に自分の思いを振り返った。 <u>自己を見つめる姿</u> かかわり合い後の学習記録に、幸美は「確かにそう思ったけど」と記している。幸美125の思いは自分自身にたしかにあると認めたと、そこから揺れて「店のために」という自分もいることに気づいてきた。それは、自分が頑張って作ったチラシや手紙などは「前の自分より……ということとは違う」と、はっきりと言い切っている。これは、発言内容から判断すると、瑛心と壮汰の発言に影響を受けたと考える。			

○敬子の場合

子ども	かかわり合い前 (学習記録)	⇒ かかわり合い T83後の発言	⇒ 自己を見つめる かかわり合い後 (学習記録)
敬子	食品屋の柵木さん レジ袋に入れたり、値段を教えたり、お奨めの国産のヒラメがいいと宣伝したい。柵木さんの店のいいところを聞いたり見つけてお客さんに教えたい。	敬子99 妙な感じなんだけど、お店の人のために強いんだけど、前よりもできるよりは前行ってないから、一応、本物の時とちよつと同じようなことで、だから、どうしても、知らない人だと、あいさつとか、知らない人だと、どうしてもちっちゃくなっちゃうから、自分、前よりもできるように、大きい声で宣伝したり、あいさつをするっていう方で、<u>お店の人のためにいこう</u>ところでは、あのいろんなところを知ってもらいたいっていうところで、どっちもあるんで、ちょっと瑛心君といっしょで、まんなかなかないと思いました。	食品屋の柵木さん 明日の二七市で、自分でも納得できるくらい、店の人のためにいろいろなことを手伝いたい。私は、真ん中だけど、迅君や幸美ちゃんの意見を聞いて、そういうこともあるかもと思った。私は、<u>ほんの少しだけ、お店のためにという気持ちが強い</u>と思う。訳は、プレゼントや看板やチラシは、店の人のためだと思うから。だから、私は、少し変わって、ぎりぎりお店の人のために近いかな。<u>さっきは真ん中だったけど、変わった</u>。明日は、いろいろな道具を使っていることを手伝いたい。
「いいところを聞いたり見つけてお客さんに教えたい」からは、敬子は柵木（ませぎ）さんに魅了され、積極的にかかわっていこうという意識が伝わる。ただ、敬子99では、「妙な感じ」と言いながら、「前よりもできるように」「お店の人のためにいこうところでは」と、2つの思いを1つずつ語り、「真ん中かな」と、自分の思いを振り返った。 <u>自己を見つめる姿</u> 敬子は、幸美99と迅104の発言にふれ、自分と比べたことで、「ほんの少しだけ、お店ののためにという気持ちが強い」自分に気づいている。そして、「さっきは真ん中だったけど、変わった」とこれまでの自分とも変わったということを自覚している。			

<教師支援②の有効性の結論>

教師支援②は、これは自己を見つめさせるためのかかわり合いの「仕組み」としては有効だと感じた。構想そのものはシンプルでよいと感じたが、肝心なのは、かかわらせたい中身と授業展開がこれでよかったかどうか。

11月16日のかかわり合いでは、「店の役に立ちたい」と誰もが共通して抱いたなかで、活動に込めた思いの方向性の違いを取り上げた。ただ、2つの思いにはもともと境目がないものであるため、かかわり合いを構想する際には、意識の散らばり具合がわかって、各々の意識の程度差がつかみやすいように、意識分布図を作成した。これは、2つの思いが入り混じる子どもたちの意識を整理するには適していると思った。ただ、正確に意識分けできているかという点では、自信のない子が出てしまった。分布図に意識を落とす行為そのものを、子どもがやってもよいかもしれない。また、今回はやれていないが、かかわり合い前に作成した意識の分布図は、かかわり合いの後に子どもの意識を上書きすることで、前と後の意識の分布具合や学級全体の傾向や個人の変容の度合いなどが、視覚でとらえやすくなるのではないだろうか。また、上書きする作業を、子ども自身がやってみることも、前と後の自分を比較させることになるのではないだろうか。